

文化財防災ネットワーク

文化財防災マニュアル ハンドブック

民俗資料のクリーニング処置例
〈地震災害〉・〈水害〉編



独立行政法人国立文化財機構
文化財防災ネットワーク推進室

東京都台東区上野公園13-9

Tel:03-3822-1111 Mail:info_bosai@nich.go.jp



(文化庁 平成30年度 美術館・
歴史博物館重点分野推進支援事業)



文化財防災ネットワーク推進室

この冊子は防水性の紙を使用しています。

目次

1. 準備	2
2-1. 地震災害 (①ドライクリーニング、②ウェットクリーニング)	10
2-2. 水害 (①ウェットクリーニング)	21
3. 一時保管	26
4. 被災した資料への注意	28

このハンドブックは、動画版「文化財防災マニュアル～民俗資料のクリーニング処置例～」(平成31年3月制作をもとに作成したものです。)



このハンドブックでは、自然災害で被災し、汚れてしまった民俗資料の応急措置・一時保管の例について説明しています。特に今回は(地震災害)と(水害)を想定し、主に木材を素材とする資料のクリーニング、一時保管をご紹介します。この作業は、専用の作業場所を用意したうえでおこなってください。食事をとったり、普段の仕事をしたりする部屋ではおこないません。

被災文化財の復興段階

救出	被災した文化財を被災現場から救出する作業
一時保管	救出した被災文化財を安全な場所に移動し、一時的に保管する作業
整理記録	救出した被災文化財の点数を確認し、記録する作業
応急措置	被災文化財のほりこりや泥を除去し、さらに悪い状態にならないためにおこなう作業
保存修復	本格的な保存修復が必要と判断された被災文化財に対して、保存修復の専門家がおこなう作業
恒久保管	所有者の下に返却、もしくは博物館などに預けて、恒久的に安全に保管する作業
研究・活用	上記の作業のなかでおこなわれる専門的な研究活動、また、その成果を展示などを通して社会に公開する作業
防災	被災文化財の支援活動全体の経験や教訓を活かし、次の災害に備えるための作業

日高真吾「災害と文化財—ある文化財科学者の視点から」より転載

1 準備 — 「場所」



作業には屋根があり、十分に換気ができる場所が必要です。

天気の良い日や、資料が大きすぎる場合は屋外で作業をおこなうこともあります。その場合、雨除けができ、直射日光の当たらない、庇(屋根)が十分にある場所を選びます。

1 準備 — 「人」



汚れた資料を扱うため、汚れたり、濡れたりしてもよい服装に着替えます。



ほこりやカビを吸いこまないようにするため、作業者は必ずマスクを装着し、カビなどが髪の毛に付着しないよう帽子を着用しましょう。

帽子は食品加工場などで用いられる使い捨ての作業帽子を使用しましょう。

1 準備 — 「現状把握」



マスクは、耐油性なしで $0.1\sim 0.3\mu\text{m}$ の微粒子を95%以上除去できる「N95」や「DS2」という規格のものを使用しましょう。



作業後は毎日きちんと服を洗きましょう。
この際、漂白剤で殺菌し、洗濯することが望ましいです。
作業による健康被害を防ぐため、怠らず対応しましょう。



作業場所にブルーシートを敷き、作業の準備をします。



資料を運びこみ、平らな場所に置いていきます。



資料をおきながら、状態を観察していきます。



資料には整理番号をつけていきます。



整理番号を記入したタグを資料につけます。



タグを使用する際は、資料をいためないように針金ではなく柔らかい素材の水糸に取り換えましょう。



整理番号を記録し、資料リストを作成します。



資料と整理用のタグを写真に撮り、記録します。



墨書・焼き印などがある場合、写真を撮り、記録します。

- ※ 写真記録には、民俗文化財の保存処置の理念として現状維持を基本としていますので、処理前の形状から変化していないことを確認するための記録の意味もあります。そのほか、作業中の取り扱いで留意すべき脆弱な箇所や破損箇所などについても記録します。

2-1 ①ドライクリーニング

(地震災害の場合)



クリーニングをおこなう際には、必要な道具をあらかじめ用意しておきます。

地震災害などで、砂やほこりにまみれた資料については、刷毛・筆で取り除きます。

※ 刷毛や筆は、資料への当たりが柔らかいものを使用します。



被災した民俗資料は基本的に、刷毛や筆などで土やほこりを取り払います。



刷毛やブラシは資料の木目に沿って動かします。

2-1 ②ウェットクリーニング

(地震災害の場合)



掃除機を利用する際は吸い込み口をネットで覆い、吸い込み防止をおこなきましょう。

(水拭き)



泥などが強力に固着して刷毛や筆だけの作業ではとれず、一時保管場所を著しく汚してしまうことが懸念される資料は、水拭きをおこないます。



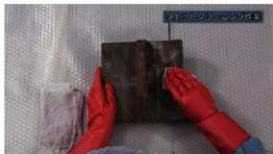
水拭きをおこなう際には、汚れていない場所を用意しましょう。



水拭きをおこなう際には、毛羽立ちの少ないウエスを用いることが望ましいです。ウエスは縫い目が資料にひっかからないように切りそろえます。

水を含ませたウエスで資料の表面をいためないよう、汚れを拭き取ったり、たたき拭きをおこなったりします。

「拭き取り」



木部全体の汚れを除去する場合は、拭き取り作業をおこないます。拭き取る場合は、木目に沿って丁寧に作業をおこないます。

「たたき拭き」



木部の隙間や亀裂などにしみ込んだ汚れを拭き取る場合は、たたき拭きの作業をおこないます。水分を十分に含ませたウエスを用いて力加減に気をつけながら作業をおこないます。

「墨書などの拭き取り」



墨書や焼き印を水拭きする際は、それらが消えないよう注意しましょう。

※ ウエスは一度作業で使用したら、水洗いして利用します。汚れた面を何度も使用すると資料を汚すことになるので気をつけましょう。

(陰干し)



ウェットクリーニングした資料は、時間をかけてゆっくりと陰干しをします。その際、カビの発生や変形に気をつけ、こまめに状態を観察することが望ましいです。また、表と裏を返すなど、全体的に均一に乾かすことに留意しましょう。

(作業後)



作業後は作業した場所を清浄にします。

(カビへの対応)



すでにカビが発生していたり、新たにカビが発生した場合は、HEPAフィルターが装備された掃除機を用いながら除去しましょう。



※ カビの処理をおこなう場合の作業場は、HEPAフィルターが装備された空気清浄機を設置して作業をおこなうことが望ましいです。

カビが発生している資料の例 ①



カビが発生している資料の例 ②



河川災害などによる水害で泥が著しく付着した資料は、水拭きによる洗浄、漬け込みによる洗浄に処置方法が分かれます。いずれの場合も洗浄後は、しっかり乾燥させます。



泥が資料表面にそれほど固着しておらず、水拭きによる対応が可能と判断されたものは、P.13でご紹介したウェットクリーニングの方法と同様の処置をおこない、陰干しをおこないます。

(漬け込み)



泥が資料表面に著しく固着している場合は、コンテナに張った水の中で資料を漬けて込んで、固着した泥を緩めます。



きれいな水を張ったコンテナに資料をうつして、仕上げの洗浄作業を行い、泥がある程度除去できたら、資料を取り出します。

※ 漬け込みをする際は、資料の浮き上がりを防ぐため、重しで押さえます。このとき、資料と重しの間にはフェルトを挟み、資料に重しの跡がつかないようにしましょう。



こびりついた泥が緩んできたら、筆や刷毛を用いて少しずつ、泥を落としていきます。



急激な乾燥による割れや変形を防ぐため陰干しをして時間をかけて乾燥させます。また、カビについての対応は、先ほどご紹介したカビの手順と同様です。

※ 金属を含んだ民俗資料を漬け込み洗浄する場合は、さび止め処理をする必要がありますので。その際は専門家の指示を仰ぎましょう。

※ 漬け込み作業は、民俗文化財の保存処理の工程の中では最も事故が起きやすい処理です。

※ 民俗文化財を浸漬することによって、逆に民俗文化財の劣化を促進させる可能性があります(複合素材の場合)。

(彩色や漆などがある場合)



彩色や漆をはじめとする塗料がある場合は、洗浄作業の中で泥と一緒に落としてしまう可能性があるため、その場合は専門家の指示を仰いで作業をおこなってください。

3 一時保管



応急措置をおこなった資料を整理し、一時保管場所へ移します。



どの資料を収納ケースに入れたか整理リストに記録しておきましょう。



コンテナなどの収納ケースを用意し、保管すると作業がスムーズにおこなえます。収納ケースには整理番号をつけます。



資料を一時保管場所へ移します。

※ 一時保管場所は、被災資料の量や大きさを考え、なるべく余裕を持った広さのある場所を確保しましょう。

4 被災した資料への注意

破損した民俗資料は、一見、がれきのようにも見えます。間違っただけで廃棄してしまわないよう、民俗資料かもしれないと思われるものは、すべて箱や袋に入れて保管し、散逸しないようにします。本格的な保存修復など、次の段階に作業が移ったときは、もう一度、丁寧に確認しましょう。



※ ここまでの工程や、資料の本格的な修理などについてわからないことがあれば、専門家に意見を求めましょう。

このハンドブックは、国立文化財機構 文化財防災ネットワーク推進室が、平成31年3月に文化財防災ネットワーク推進事業(文化庁 美術館・歴史博物館重点分野推進支援事業)の一環として、「文化財防災に関する普及・啓発活動」のために作成したものです。

この用途に基づき使用であれば、非営利の公開行事(展示会、シンポジウム、研修会など)で使用することができます。ご使用になる際は、今後の事業の参考に資するため、使用状況などについて下記連絡先までお知らせいただければ幸いです。また、ご使用にあたっては、出典として©2019 国立文化財機構を明示してください。

営利目的でハンドブックを複製・再配布(インターネット配信を含む)する場合は、事前に下記までご連絡ください。このハンドブックを、著作者の許諾なく改変することは出来ません。

連絡先: 国立文化財機構 文化財防災ネットワーク推進室
〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9
Tel: 03-3822-1111
Mail: info.bosai@nich.go.jp
URL: <https://ch-drm.nich.go.jp>

監修 日高真吾(国立民族学博物館 教授)
シナリオ構成 河村友佳子(国立民族学博物館 プロジェクト研究員)
橋本沙知(国立民族学博物館 プロジェクト研究員)
相高智美(合同会社文化創造巧芸 代表)
協力 小谷竜介(東北歴史博物館 学芸員)
加藤幸治(東北学院大学 教授)
菊池健策(日本民具学会 会長)
国立民族学博物館
制作 白木ひかる(文化財防災ネットワーク推進室)
撮影・編集 佐野真樹(文化財防災ネットワーク推進室)
撮影助手 小田原直哉、森一人
音楽 有田尚史
ナレーション MA 古谷舞子
川口隆一
発行 国立文化財機構 文化財防災ネットワーク推進室
初版:平成31年3月